

[成果情報名] 畑谷大沼における電気ショッカーボートでのオオクチバス駆除（2020年度）

[要 約] 畑谷大沼における2020年の推定生息個体数は88尾であり、駆除を開始した2017年以降最も少なかった。二歳魚の駆除は翌年以降の繁殖に参加する個体を減少させ、また、当歳魚の駆除は次年度以降の親魚候補の減少につながるかことが確認された。

[部 署] 山形県内水面水産試験場・資源調査部

[連絡先] TEL 0238-38-3214

[成果区分] 研

[キーワード] オオクチバス、駆除、生息個体数

[背景・ねらい]

本県において、ブラックバスは昭和50年代から見られるようになり、それ以降分布域が拡大している。外来魚による内水面漁業資源への被害拡大が危惧されており、内水面漁業協同組合による駆除、密放流や再放流禁止の啓発活動などが実施されている。1995年にブラックバスおよびブルーギルの移植放流が禁止（山形県内水面漁業調整規則）、さらに2017年には内水面漁協が管理する漁場において採捕したブラックバス等のリリースが禁止された（山形県内水面漁場管理委員会指示）。

畑谷大沼では、2017年以降、民間コンサルタント会社が保有する電気ショッカーボートが山形県内水面漁業協同組合連合会に無償で貸し出され、外来魚駆除を共同で行っている。「電気ショッカーボートでのオオクチバス駆除による生息個体数の推移（令和元年 政）」で、二歳魚の駆除は翌年以降の繁殖に参加する個体を減少させ、また、当歳魚の駆除は次年度以降の親魚候補の減少につながることを示した。2020年度の結果を報告する。

[成果の内容・特徴]

- 1 2020年は、10月4日に、畑谷大沼での電気ショッカーボートによる駆除を実施した。電気ショッカーボートで池を周回しながら4回行った。
- 2 駆除は各回とも1周約1時間の採捕であったため、プログラムcaptureを用いて除去法により畑谷大沼におけるオオクチバス生息個体数を推定した。2020年の推定生息個体数は88尾（95%信頼区間73～118）であった（表1）。推定生息尾数は、2017年は456尾、2018年は536尾、2019年は147尾であり、2020年は2017年以降最も少なかった（表1）。
- 3 駆除したオオクチバスの全長組成を示す図1。前年度まで同様に二歳魚とみられる群が最も多く採捕され、次いで当歳魚とみられる群が多かった。二歳魚の駆除は翌年以降の繁殖に参加する個体を減少させ、また、当歳魚の駆除は次年度以降の親魚候補の減少につながるかことが確認された。

[成果の活用面・留意点]

- 1 閉鎖性水域における駆除の継続は確実に個体を減らすことが可能であることから、継続した駆除作業を実施する必要がある。
- 2 繁殖期である春に実施することで、より効率的に駆除を実施できる。

[具体的なデータ]

表1 2017年以降の畑谷大沼における電気ショッカーボートによる駆除結果と推定生息尾数

調査年	調査月日	採捕尾数					総採捕尾数 尾	水温 ℃	推定尾数 尾	95%信頼区間
		1回目	2回目	3回目	4回目	5回目				
2017	8月24日	145	95	72	-	-	312	25	456	421-502
2018	10月13日	125	130	77	51	-	383	18	536	495-592
2019	10月20日	27	24	26	-	-	111	15.6	147	129-183
	10月26日	-	-	-	25	9		15.2		
2020	10月4日	12	21	15	10	-	58	18.0	88	73-118

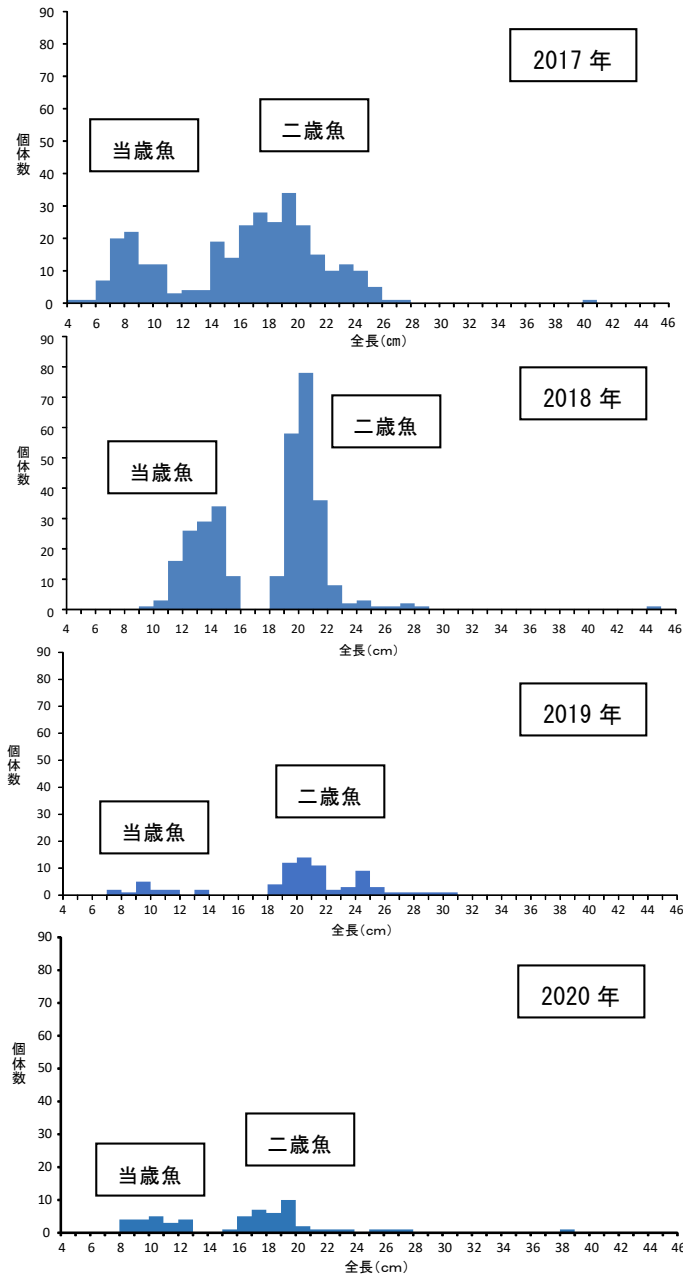


図1 畑谷大沼において電気ショッカーボートで駆除したオオクチバスの全長組成

[その他]

研究課題名：カワウ・外来魚等対策事業

予算区分：県単

研究期間：令和2年度（平成29～令和2年度）

研究担当者：河内正行、山形県内水面漁業協同組合連合会

発表論文等：なし